

街を行く

第134回 函南 Kannami

丹那トンネルがあるじゃないか



歩くほどの街でなくとも、函南にはトンネルがあるじゃないか

熱海と三島に挟まれて普段注目されない街、函南を訪ねました。

東京から東海道本線に乗り、熱海駅を過ぎ、長いトンネルを抜けた先が目的の函南駅。車内でトンネルには気づけても、その先の街に気づく人はほぼいないでしょう。駅から周囲を見渡せば、熱海や三島とまったく違う景色が広がっています。一軒の商店も見当たらぬ、街を歩くどころでない環境でした。函南は、昔は豊かな水をたたえた肥沃な土地で農業が盛ん。沢で採れる山葵の名産地でもあったようです。トンネル掘削で水源が枯れた今は牧畜が盛んと聞きます。ある意味トンネルが街を変えてしまったということです。トンネルの名前は「丹那トンネル」、日本ではじめて“建設が着工”された大型トンネルです（ちなみに新幹線で熱海を過ぎて入るのは「新丹那トンネル」で、東海道本線上にあるのがオリジナルです）。少し説明いたしますと、日本最古の大型トンネルは、川端康成の小説「雪国」

で知られる「清水トンネル」（1931年完成）であることに疑いはありません。しかし、建設開始時期ならば1922年の清水トンネルより1918年の丹那トンネルのほうが先というわけです。ちなみに、丹那トンネルが開通するまで国府津-沼津間は今の御殿場線が東海道本線を名乗っており、列車は補助機関車を連結し急勾配を走っていたそうです。さらに豆知識を開陳すると、トンネル工事を推し進めた中心人物は後藤新平（第7代東京市長で街づくりの基礎を考えた人）でした。

当時の技術水準からして工事は困難だったろうと想像し、開発された方々を尊敬しました。いまや国を超えた地球単位で巨大インフラ整備が可能で、空を飛ぶ車や自由な宇宙旅行すら実現できそうなテクノロジーもあるわけで、トンネル工事など難しいことではないかも知れません。しかし大工事にかける人々の口マンや情熱はどの時代でも負けない、感じるのは小生だけでしょ

うか？明治・大正の人たちが成し遂げたことに口マンを感じてワクワクしてしまうのです。国造りという共通の目標を掲げ、大勢が思いを一つにした事業だったのでしょう。歴史には勝てない、とはこの事かも知れません。

今回は、街というのは目に見える活気や繁栄だけでなく、歴史という無形の面白さがあることに気づいた街歩きでした。見落としていた街や街の要素があるかもしれない、コロナを通じて考え直さなければなりませんね。

南一弘



1982年大学卒業後、三井不動産販売に入社。ローンスター・ジャパン・アプライシングスを経て、2001年エースト・ジャパン・エルエルシーを設立。同代表に就任。2005年4月MID都市開発（旧松下興産）の代表取締役に就任。2006年ジャパン・アセット・アドバイザーズを設立。同代表取締役に就任。